
新選組居候物語。

紅葉or紅蓮 & 閃羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新選組居候物語。

【Nコード】

N0023Y

【作者名】

紅葉or紅蓮&閃羅

【あらすじ】

俺、氷野紅葉はフツの中学三年女子。つつても、もう卒業して、今は春休みつてとこだけど。そんな俺が、ある夜自室から出ようと思つて扉を開いた……ら、アレ、ポニテのおにーさん、何で俺ん家いんの。アレ、ここどこ？——かの有名な土方歳三の部屋に（しかも本人踏み潰して、俺の部屋ごと）トリップしてしまった。しかも、遠くの部屋から友達の叫び声聞こえてくんだけど……ま、そんなカンジで始まります。

この小説は、ふいに親友が言った「もしウチと紅蓮ちゃん（作者の呼び名）が薄桜鬼の世界にトリップしたらどうなるんだろうね？」という言葉から始まった小説です。そういうのが苦手な人は、この小説はおすすめできません。

プロローグ（前書き）

初めまして、紅葉or紅蓮です。

はじめに、注意事項をいくつか。

- ・この小説は、現代からオリ主が二人、トリップしてきます。
- ・そして作者とその親友がモデルです。御免なさい調子乗ったとか言わないで分かってるから。あ、殴らないで。
- ・そしてマトモな性格の子じゃありません。

あ、言い遅れましたが、この小説ではオリ主達の世界では3月下旬という設定になっています。

それでもOKですか？

では、どうぞ！

プロローグ

三月下旬、つまりは春…のはずだが、窓から見た景色の中から、未だ雪は消えていない。

氷野紅葉はそれを見て、何を思ったか、白い息を吐き出した。そのまま視線を上げ、満月をじっと見つめる。

氷野紅葉。 中学3年生。 女子。

今年の四月から晴れて高校生となる彼女は、頬杖をついてもう一度ため息を吐き出した。

「ねーちゃん、もう10時だよ。寝ないの？」

「あー、青葉。眠れないんだよ、ついさそっいつお前は何で起きてんだ」

扉をガチャリと開け、そう言ったのは妹の青葉である。

紅葉が前を向いたままそう問うと、彼女はさもあたりまえかというように言い放った。

「え、そりゃD iしてたから」

「さっさと寝ろや。」

…ほら言ってたじゃん、明日友達と約束してんだろ？」

「あッ」

青葉はそうだった！というように声をあげると、そのまま扉を閉め自分の部屋に戻っていった。

紅葉はそれに苦笑し、また視線を外へと戻す。

紅葉は、悩んでいた。高校での人間関係のことで。

彼女は、友達作りがあまり得意な方ではない。

雰囲気からか、行動からか。はたまた吊り上った目からか。

普通の顔（大体無表情）をしていても、「睨まれている」と思われてしまうのだ。

だから、悪い噂を流されるやら、物を隠されるやら、悪口を言われるやらで、人と関わることで自体に嫌気が差していた。

勿論そんな彼女でも友達はある。そこらの女子や男子の人数に比べれば少ないが、それでも話を分かってくれる人はいらる。（叩いたり

殴ったりしているがそれは彼女達にとってのスキンシップ

しかし、中学を卒業し、友達とはいずれバラバラになる。

(…また、0^{ゼロ}になるのか)

そう考えて、自分が後ろ向きになっていることに気付き、首を振ってその考えを振り払う。

「…なんか飲むか。少しは気分良くなるかも」

一人でにそう呟き、部屋のドアノブに手を掛け、開いた。

それと同時に、ぐんつと引つ張られるような、イヤ、どちらかというところから落ちるような感覚に襲われる。

「…え」

ヒュン、ドスツ、バキツ

…ええと、これどういう状況？

紅葉は今起こっている状況を整理する。

俺がネガティブになってた 水を飲みにくいこうと部屋を出た なん
か落ちた なんか黒髪ポニテのおにーさんの背中を踏み潰し、その
衝撃でおにーさんの机？を真っ二つに壊した。

(…え、やばくね？つーかここ、何処？)

プロローグ（後書き）

今回出てきた「氷野紅葉」は、俺（紅葉or紅蓮）がモデルです。
なんか自分で書いてて恥ずかしい…

紅葉が踏み潰した人物はいつたい誰なのか！？
そしていつたいここは何処なのか！？

これから『新撰組居候物語』をよろしく願います！

1

今の状況を説明しよう。

ネガティブ思考に走っていたので水を飲んで落ち着こうとした
部の扉を開けた　なんか落ちた　人を踏み潰して机壊した

俺、氷野紅葉はあたりを見回した。

古風を漂わせる庭、障子、襖、畳…今時、こんな家ってあるのか。

突然の出来事に呆然としていると、下から声が聞こえた。

「デメッ…いつまで……乗って…んだよッ」

「んあ？」

下を見ると、そこには黒髪ポニテのおにーさん。

どうやら、俺に踏まれているのが嫌らしい。（当たり前だけど）

「ああ、悪い、今下りる……」

そう言い、下りようと足を動かす。すると、なにかさうとしたものが足に当たった。

「……」

足に当たったもの、それは男の髪「イッ」の毛だった。

男は俺が黙ったのにも気付かず、「早く下りろよッ」と呻いている。

「……」

踏踏踏踏踏踏踏踏踏踏！！

「いまだだっ！？テッ、テメエ…いきなりなにしゃがる！？」

うるせえ。

男がこんな髪の毛サラサラに生まれてきちゃいけねえんだよ。

そう思いながら、男の背中を踏み続ける。

「いてえつつつつてんだろ！？」

「俺を怒らせんのが悪い」

「はア!？」

俺の言い分になんか文句あんのかコラ。

男のサラサラヘアをにらみつけながら踏み続けていると、なんか廊下からドタドタと人が走っている音が…ってアレ、近づいてね、音近づいてね？

「土方さん、…何してんですか？」

あ、茶髪のイケメン。こいつも髪サラッサラだなオイ。一体どんなシャンプー使ってたんだよ教えろよ。

「テメツ、総司!…こい…っ、止める!…」

「……………」

茶髪は無言でニコリと笑うと、こちらに近づいてくる。

「……」

俺も無言で睨み返す。何だコイツ、違う意味で怖い。ニコニコしながら無言って怖い。

そう思いながらも男を踏む足は止めない。すると、茶髪は片足を上げ、

踏踏踏踏踏踏踏踏！

俺と一緒に男を踏んでいた。めっちゃニコニコしながら。何コイツ、以外と良い奴？

っーか髪サラッサラだなオイ。

茶髪は男を踏みつけ、しかし手は刀の柄に掛けられていた。ん、ちよつと待て、刀？

「…それ、本物？」

「勿論。本物だよ。斬られてみる？」

「いえ全力で遠慮します」

「デメエらツ…俺を踏みながら話してんじゃねえ！！」

あ、忘れてた。

渋々男の背から下り、起き上がった男（あ、コイツもイケメンだ）と茶髪（もう一度いうがコイツもイケメンだ）に向き合う。そしてふと違和感を感じる。

ん？なんかコイツらどこかで…

無い頭を捻って考えていると、男が眉間にすっげえ皺寄せながら口を開いた。

「テメエ、何者だ？」
なにもん

「土方さん、さっきから「テメエ」しか言ってますよ」

「黙れ総司」

何これコント？

そう思っていると、男はさっきよりももっと眉間に皺を寄せて聞いてきた。

「何故上から降ってきた？テメエのせいで机も台無しだ、どうしてくれる」

「いや、それは俺じゃねえし。アンタが勝手に壊しただけだし」

「お前が降ってきたからその衝撃で壊れたんだよ!」

男が鬼の形相をしてそう言った。うわ、めっちゃ怖い。
よくアニメであるよねこういう表現。初めて見たけど。

「土方さん、」

「あ!?!なんだ総司」

「上、上」

そう言い茶髪は上、つまりは天井を指差す。するとそこには、

「…なんだありゃ」

「……俺の部屋」

「……土方さん、僕土方さんの部屋で悪戯しまくってたけど、こんなの初めて知りましたよ」

「…安心しろ、俺もだ」

「……」

うわ、黙ってこっち見ないで。

俺は二人から顔を逸らす。すると、茶髪が問うてきた。

「あれ、君の部屋って言ったよね？」

「あーうー」

「真面目に答えなよ」

…なんだろう、笑顔なのに後ろになんか黒いのが見えた。

俺は渋々と茶髪の答えに頷く。

すると、今度は男が問う。

「じゃあ何で、俺の部屋の天井に、お前の部屋があるんだ？」

「そんなの知るか。髪サラッサラ野郎が。お前すべての女を敵に回したぞ」

そう言うと、男の額に青筋が浮かぶ。茶髪は腹を抱えて大爆笑していた。

男が怒鳴ろうとしているのか大きく口を開く。が、怒鳴り声は生み出されることは無かった。

「本物だアアアアアアアアアア！！！！！！！」

「ギヤアアアアアアアアアアア！！！！！」

!

「何だ!？」

「今の声」

思わず冷や汗が頬を伝った。俺は部屋を出て行こうとする男に声を掛ける。

「なあ」

「あ!？」

「俺も連れてってくんない？心当たりが……」

「はア！？んなもん駄目に「いいよ」オイ総司！！」

茶髪がOKを出してくれたので、俺は彼らについていくことにした。

…なんだろう、嫌な予感して堪らないんだけど。

＊

声のした部屋に駆け込み、襖を開ける。

「平助、原田！！どうし…た」

「その子、誰？」

襖を開け放ち大声でそう言った、が、その言葉が途切れるほど呆然とした様子の男に相変わらず笑顔を崩さない茶髪。

彼らが見たのは、女子に服を剥がれている最中の男二人。

「…何やってんだ」

「そういう趣味あったんだ？」

「ねえよ！！コイツいきなり現れたと思ったら…！」

「いきなり服剥いできて！オイなにやって痛たたたたたた」

赤髪の男が女子を止めようと手を伸ばすが、体を固められ悲鳴を上げる。

俺は只今変態モード真つ最中な馬鹿の頭にとび蹴りをかました。

ドガッ
シャアアアアア
...

「いってええええええええええ！！！」

「…お前、何してんだよこんなところで。つーかもつ変態じゃねえかマジもうこれから近寄らないで」

「ひどい何ソレ！って……あれ？紅葉ちゃん？」

「ハイ紅葉ですけど何か。俺には変態の知り合いはいないから残念だけど」

「ちょ！見捨てないで！てゆかさ、この二人本物の左之さんと平助君だよ！ヤバイ！鼻血でる！萌える！腐女子のおいらがトリップしちゃったよ！！」

「ウゼエ。マジウゼエ。…ああ、やつと思い出した。ここ『薄桜鬼』の世界か」

「うつほおおおい！夢が叶った！ずっとトリップしてみたかったんだよね！」

「お前少し黙ってる」

「…そろそろ、説明してくれるかな」

「あ、ちょっと待って、コイツの間接壊してから」

「おおおお！沖田と土方もいるっ！！やべええええ！！萌える「死ね」ちょ…紅葉ちゃん冷たい…」

「黙れ」

そう言い俺は奴…閃羅彩斗せんら あやと（女）の腹にパンチを入れる。

「グハッ！さ、さすが紅葉ちゃん…手加減ナシ…、」

「黙つとけや」

「…総司、原田、その女二人連れて来い。尋問だ」

「「マジでか」「

この出来事を通して俺たちはひとつ、気付いた。

どうやら俺たちは、『薄桜鬼』の世界に（部屋ごと）トリップしたらしい。

#1（後書き）

紅葉（主人公1）

「どうもハジメマシテ。氷野紅葉です」

彩斗（主人公2）

「どもども、閃羅彩斗です」

紅葉

「とうとうやったな。フツウの俺がトリップするなんて思わなかった…」

彩斗

「ちょっと何ソレ！まあいいじゃない！楽しそうだし」

紅葉

「なんで？滅茶苦茶ウゼンだけど。まあいいや、もう閉めようぜ」

彩斗

「ちなみにこの小説の中の主人公2人とリアルのおいら達まったく一緒ですハイ。リアルにいつも二人でこんなやり取りしてます」

紅葉

「勿論、所々違う場所はあるけど。」

…『新撰組居候物語。』をこれからもよろしく願います」

彩斗

「誤字・脱字などありましたら報告願います、紅葉ちゃんに」

紅葉

「ふざけんな。あとで覚えてろよ」

彩斗

「（．．．）でわ、また！」

#2（前書き）

#1では紅葉視点だったので、#2は彩斗視点です。

これからは紅葉・彩斗・紅葉・彩斗の順で書いていきますので、これからよろしくお願いします。

#2

紅葉ちゃんと感動(?)の再会を果たし、愛しの土方さん達に連れてこられたのは広間だった。

あ、ここで千鶴ちゃんも尋問受けてたよね！

「おおお本物だ！やべええ！興奮する！」

「デメエ静かにしやがれ！」

土方さんに怒鳴られたけど気にしない。

隣の紅葉ちゃんはキヨロキヨロと周りを見ていた。

「入れ」

低い声で土方さんはおいら達に命令する。

うへへへへ…土方さんに命令された… キモイ

そう思っていると紅葉ちゃんに頭を殴られた。

「いつてええっ！ちょっと殴ることないじゃない！」

「余計なこと考えてないで、前向けや」

「ハイ、すみませんでしたアアア！」

スライディング土下座する。と、こっちを見ていた平ちゃん（平助）に「おお……！」と目を輝かしてこっちを見ていた。なんだろう、なんか優越感。

「無駄口叩いてねえで座れ。」

「はい！」

土方さんに叱られ、その場に胡坐をかく。すると、紅葉ちゃんに膝を思い切り叩かれた。

スパアアアン！

「いつてエエエエエ！？ちよっ！マジ、痛い！」

「まだわからない？もう一回やろうか」

「すいません正座します、本当にすいませんサーセンしたアアアア
！！」

「うるせえつつつてんだろっが！！」

あ、怒鳴られた。
でも萌える。

「で、だ！お前らには聞きたいことが山ほどある。正直に答えろよ。
少しでも嘘をついたり逃げようとしたら……斬る」

「いや、こつちもこつちで色々分かんないことだらけなんだよ。何でさっきまで夜だったのに夕方なのかとか、部屋から出たらアンタ踏んでたかとか」

「え、土方さん踏まれたの？」

「お前勇氣あるなア」

「いや別に？つーかコイツが髪サラッサラなのが悪いんだよ」

「まあまあ紅葉ちゃん！落ち着いてー」

いや確かにおいらもそれはムカツクけどさ。
萌えるからよしなんだようん！

「お前は黙つとけ」

「ハイ・・・」

お口チャックします。

土方さんはいいらを見て一つ息を吐き出し、本題に入るため口を開いた。

「平助、原田。その茶髪の女は上から降ってきたか？」

「あ、ああ……」

「俺と左之さんで酒飲もうと俺の部屋に入ったらいきなり落ちてきて……」

「俺の時と同じか……」

「あ、あのー……」

おいらはおずおずと手を挙げる。

「なんだ」

「た、多分んだけどさ、おいら達…異世界から来たんだと思う…」

「……」

「……」

『はアアアア！？』

ま、まあいきなりだしそういたくなる気持ちわかるけど！
だってあきらか『薄桜鬼』だもん！

このイケメン揃いの新選組はあきらか薄桜鬼だ！！

「んな話信じられるワケねえだろ？」

「ホントだってば！だっておいら部屋から出ようとしたらいきなり
平ちゃんの部屋に落ちたんだよ！？」

「へ、平ちゃん？」

平ちゃんが驚いているが気にせず、彼らを納得させれるような言葉を探す。

「今の年号はえつと…文久でしょ？おいら達のいた未来の異世界では平成っていうの！この時代から150年以上経ってるの！」

「って言われても…なあ？」

「ああ、証拠もないし…」

「あるじゃねえか。俺達の部屋が」

「だからってな…」

「普通部屋の天井に扉つけるやつなんていないだろ。そんなことも分かんないのか？だから踏まれるんだよ！」

「んだとテメエ！？」

土方さんはゲームとかで見てたときよりも確実に多く眉間に皺を寄

せて刀の柄に手を掛ける。

紅葉ちゃん、土方さんの事踏んだのか…うらやましいな。

「うーん…やっぱり信じてもらえないよね」

「当たり前だ」

なんか信じてもらえる方法はないか…おいらは腐りきった頭で頑張
って考える。

「…あ！そつだ！ならおいらの部屋行ってみましょうよ！」

「ああ、アンタの部屋…あれがあるからか」

「うん、あれ！」

『???』

薄桜鬼メンバーは頭に疑問符を浮かべた。

ん？そういえば…

「部屋の扉天井じゃん！？届かないじゃん！？」

問題が発生して思わず頭を抱える。すると、紅葉ちゃんがそれに気づいて、

「ああ、それなら」

そう言い顔をある方向へ向ける。

疑問を感じ、そっちを見た。…ら、

「もう作らせてる」

永倉さんがせつせと働いてました。

早！？いつから作ってたの！？

「ん？ここに入ったときから」

「いきなり『梯子^{はしこ}作っとけ』って言われてビックリしたなア……」

心読むな！！

さ、さすが紅葉ちゃんだな……おいら気づかなかったよ。

「んじゃ出来るまで君達の作った未来の話を聞かせてよ」

「作り話じゃないっつーのー！！」「」

「はいはい。それで？未来はどんななの？」

「うーんと……」

何から説明したらいいか…あッ

「未来はいろんなものがハイテクになってるよ」

「『ハイテク？』」

「あ…あー…『便利になる』ってこと」

「そっかー、カタカナ言葉ダメなのかー…」

まあ幕末だし仕方ないけどさ…わざわざ説明すんのめんどうだな。

「んと、たとえば電話とか、パソコンとか…車とかが代表的かな。後テレビとかも！」

「な、なんだそれ…」

「電話は遠くにいる人とでも話せる物だよー」

「そ、そんなモンがあんのか？」

「イエス！あ、イエスっではいつて事ね！」

「いちいち面倒だな…」

うんざりと隣にいた紅葉ちゃんが言う。

「パソコンは…まあおいらの部屋行つたときに言えばいいか！」

「車つっつーのは人を乗せて走る乗り物のこと。ここでいう…馬？が
進化したやつ」

「いや、その説明ちよつと無理が…」

こんな感じで、新八つつあんがはしごを作り終わるまで薄桜鬼メン
バーと雑談していた。

#2（後書き）

彩斗

「グダグダな回だった気がする」

紅葉

「台詞が以上に多かったな。それで薄桜鬼メンバーに空気な人が続出…」

彩斗

「そつだよねー…山南さんとか一ちゃんとか近藤さんとか源さんとか千鶴ちゃんとか…千鶴ちゃんとか一ちゃん出してあげられなくてごめん！大好きだよ！」

紅葉

「なんかウザイ」

彩斗

「（・・・）……ここまで読んでくださった皆さんありがとうございました！」

紅葉

「これからもこの小説を応援よろしくお願いします！-」

#3

尋問から数分たって…

永倉新八さんに頼んでおいた梯子^{はし}が完成し、俺たちは今チビ助（平助）の部屋の中にいた。

「…酒」

「んだよ…飲んじゃ悪かったかよ？」

俺が思わず呟いた言葉を聞いてしまったのか、ふて尽くされたような顔をしてそう呟くチビ…平助。

俺は彼の言葉に首を横に振る。

いや、俺が言いたいのはそんなことじゃない。

怪訝な表情を浮かべる平助に、俺は言ってやった。

「お前未成年じゃ…」

「俺は20歳だよ！！悪かったな餓鬼で！」
はたち

俺の言葉にそう大声で言い返す。五月蠅い、声がデカい。

「つか、え、ちょっと待て20歳？」
はたち

「うそだあ」

「ホントだっつーの！！」

あからさまに「嘘つくなよ」って顔で言っただけ。ら、またそう叫ばれた。

俺はそのまま視線を彩斗に向ける。それに気づいた彼女はニコリと笑い、

「ホントだよ」

と言いやがったコイツ。

…ええマジ？俺コイツより年下…？

そう俺が（表情には出さないが）落ち込んでいる傍で、薄桜鬼メンバーは天井に付いた彩斗の部屋の扉を見て何か口々に言っていた。

「土方さんの部屋と一緒にすね」

「天井についてんな…」

「ああああ酒え〜…」

「早く！俺早く未来の部屋見てみてえ！！」

酒関係なくね？

好き勝手に話している彼らを他所に立派に梯子を掛けるといふ仕事をしていた永倉さんは、仕事を終わると俺に笑いかけてきた。

おお…イケメンだ。銀とは違うな。あ、オトイトだからか。

「オトメ トってなんだ？」

チビ助が聞いてきた。俺は思ったことをモロ口^{くち}に出していたらしい。

「あー…彩斗^{あいっ}に聞け。あいつの方が詳しいから」

「え？あ、うん…」

そう言つとチビ助は聞きに彩斗のもとへ走っていった。あ、彩斗うれし泣きしとる。

ふいに梯子を見ると、もう一人梯子を登っている最中だった。早くね？ねえちょっと早くね？部屋の持ち主に許可取つとけよ。

「いいんだよ、さっき自分で『おいらの部屋に来ればいい』って言うたじゃないか」

「ちょっと沖田さん！？確かに来ればいいっていいましたけど勝手に入っていいなんていつてませんからね！」「なに、文句あるの」「大アリです！！下着とか同人誌とか散らかってるんですから！！」

「片付けろよ」

沖田さん？にそう大声で抗議した彩斗だが、まず基本できてないお前はどうかんだコラ。十分の九はお前の責任じゃねえか。

「何で！？仕方ないでしょ！！昨日スカイプで話し込んでたら部屋の片付けすっかり忘れちゃったんだよ！スカイプが悪い！うん！」

「死にさらせ（笑）」

「ひ、ひどい紅葉ちゃん…っ！（泣）」

「ねえ、下着とか同人誌って何？」

「……」

そうか、まずそっからなのか。

「私たちの部屋にあるから見てきていいですよ」

「…いいの？」

「え、気にしないし」

沖田は怪訝な顔をしたが、構わず上がっていった。続いて彩斗も上がる。その次に原田さんが入る。その次に…。

…コイツら初めてエスカレーター見た子供かよ。

「はい！此処がおいらの部屋です！いらっしやいませー！」

「なんだこの板！？ツルツルしてるし光ってるぞ！」

「いやそれノートパソコン。光ってねえ、反射してるだけ」

「このガラクタ何？」

「ノンガラクタアアアアアアア！！！！それ電子ドラムウウウ！超高かったんだから！あと楽器だから！！！」

「じゃあこれは？なんで板の上に布団敷いてんだ？」

「ああ、それはベットって言って、未来の寝る道具だよ。」

…何だこれ。超ワイワイガヤガヤしてんだけど。土方も何しきじみと部屋見てんだよ。何これ、俺たち何してんだ？

思わずそう考え込んでしまうほど、何か目の前の彼らは盛り上がっていた。

イヤ、俺ら疑われてんだよね？コイツら大丈夫かよ、頭が。

すると、（彼らは騒いで気づいていない様だったが）下、つまり平助の部屋…の廊下の方からドタドタと音が聞こえてきた。

下りてみると、ドタドタという音が近づいてくる。音近づいてね？あれ、なんかデジャヴ。

スパンと音を立てて平助の部屋の障子が開かれる。

そこには、首に白い襟巻きを巻いたイケメンと桃色の袴を着た可愛い娘こがいた。

なんなの、なんなのここ、イケメンパラダイスですか？俺達前田子でも掘北真でもねーよ。

イケメンAは俺を睨み付けると、刀に手を掛ける。

そして、刀をすばやく引き抜いた。その素早さに驚く。こいつ、幹部か。

斬！

「うおおおおっ！？…危ねーな、何すんだコラー！」

「えっ…！？」

俺がそう言つと、女の子が驚きの声を上げる。っーかなんで女の子？ここ男所帯じゃねーのかよ。

俺はあんまり『薄桜鬼』詳しくねえんだよ。

「俺の居合いを避けた…貴様、何者だ…!？」

「は？」

いやいやいや、こいつ何勘違いしちゃってんの。コイツ俺が皆殺したか思っ
てないよなまさか。いや、頭よさそうだしそんなこと…

「…^{みな}皆の仇！」

思っちゃったアアアアアアアア!!？

イケメンAは俺に素早い攻撃を繰り出してくる。俺はそれを間一髪避けることしか出来ない。だって武器ないし。…いつそのこと、酒瓶に投げつけるか…（やめれ

するとそのとき上から声が…

「オイ斎藤！！お前何やってる！！」

「！！副長！？ご無事で！！」

「土方さん！！」

「？何言って…ああ、そういうことか」

「そういうことじゃねえよこのクソ土方！！テメエ来るの遅いんだよ！！」

思わず尻餅を付いてそう叫ぶと、斎藤とやらが睨み付けてくる。

…もとはといえばテメエのせいなんだよ…！！

そう睨み返していると、上から「あははは！！」と笑い声が聞こえてきた。

何だ？

上を見上げると、そこには梯子に腰掛けている沖田さんがいた。

「あははは！！紅葉ちゃん最高だよ！土方さんにクソ土方って…！
アハハ！！」

「わー！本物の一ちゃんはつちやんと千鶴ちゃんだーっ！かわいいなあ！」

「テメエ死ね彩斗！！」

「何故に！？」

「テメーが上で野郎どもと笑ってる間に俺は斬りかかれてたんだよ！！」

「いいじゃん！一ちゃんに斬られるなら本望っ！」

「テメー死ぬか…？」

そう言い彩斗の首に静かに手を掛ける。微笑みながら。

「ス、スミマセンデシタ…」

「分かればいいんだよ…分かれバ…ネ？」

微笑み、異常におびえる彩斗にそう言つと（大げさだな）、ふと気になったことを思い出した。

「沖田さん？」

「ん？」

「何で俺の名前知ってんの」

「彩斗ちゃんから聞いたんだよ」

「…どう説明された？」

「かつこよくて、どえすで、腹ぐるんだけど、優しいおいらの大親友！って言ってたよ。どえすとかの意味は分からないけどいい意味ではないのはなんとなく分かったよ」

俺は彩斗に向き直る。そしてニコリと笑い、言った。

「才前ヲ殺シタイ欲求ト許シテヤロウト思ウ欲求ガアルンダケド…ドツチガ良イ？」

「ホントサーセンしたアアアアアア！マジですいません！！いやマジで悪気はなかったんです！ハイ！」

「ふうん、そう…ならいいや。っーか沖田、アンタいつまで笑ってんだ」

「だ、だって…面白くて…アハハハ！！」

「え？…ええ！？」

笑い出す沖田（もう呼び捨てだとかは聞かん）を他所に、女の子は

状況が分からないのか一人焦っている。

そんな女の子にどう思ったのか、彩斗が近づき、彼女に抱きついた。

⌈
⋮
⌋

「あ、あの……？」

「
…
か、
」

「か？」

[illegible]

「五月蠅え黙れ死ね」

「《バキッ》ギャハアアアアアアア！！！」

「え！？だ、大丈夫ですか！？」

「おー、あいむおーけー、ぜんぜんだいじょあるよ」

「…ホントに大丈夫なのかよ？」

彩斗に心配そうに近づく平助。

そして平助は女の子に今までのことを話す。

すると、彼女は顔を真っ赤にして謝ってきた。

…一応性別がと一緒なんだけど、彼女を可愛いと思ったのは悪いことじゃないかな？

そのとき土方が斎藤の所から戻ってきた。話がついたらしい。

彼は皆を座らせ、口を開いた。

「お前らの話を信じてやる」

「……マジで？」

「ああ。あんなのを見せられちゃったらな。納得するしかねえだろう」

「土方さん、『上手い俳句の作り方』って本、熱心に読んでましたよねえ」

「お前は黙れ総司!!」

「あ、あれよければ差し上げますよーおいら読まないしー!」

「……ああ、悪いな」

土方は一度ゴホン、とわざとらしくえ、言い直せ?…土方はゴホン、と咳払いをし、周りを静かにさせる。そしてまた、口を開いた。

「お前らが元の世界に帰れるまで新選組で保護してやる。」

「マジで!?!」

彩斗と声が重なった。同じことを思ってたのか。俺は思っていたことを口に出す。

「マジで、偉そうに言っんじゃないやねえよ土方!」

「いや紅葉ちゃん、おいらそんなこと思っていないから」

「マジでか」

「マジマジ、大マジ」

「うるせえ!少しは黙ってろ!…お前らのことは近藤さんや山南

さんにも言っからな。」

「おお！近藤さんに山南さん！会ってみたかったんですね一度っ
！」

「本来なら絶対会えないからなあ……」

しみじみとそう呟く。そうだ。どうして俺達はこの世界にトリップ
した？どうして他の世界ではなく、そしてどうして俺達がトリップ
したのか。他にも人間なんて馬鹿みたいにいるというのに。

相変わらずの無い頭を振り絞り考える。が、何も分からなかった。
絞りすぎて汁も出ないよコレ。

すると、女の子が「あっ、あのっ！」と声を上げた。

「？」

「なんだい千鶴ちゃん？」

「わ、私は雪村千鶴と言います！！訳あってこの新選組に…」

「あーいいいいよ」

思わず声を上げる。彩斗もニコ、と笑い女の子。千鶴はそういわれた訳が分からないのか「？」と頭の上に疑問符を浮かべている。

「訳は話さなくていいよ」

「そうだよ！聞いちゃったらいら達、千鶴ちゃんに氣イ使わなきゃならなくなっちゃうじゃん！そしたら友達になれない！」

そう言うと、千鶴は顔を綻ばせ、「ありがとうございます！！」と深くお辞儀をした。可愛いなあ。

「おいらは閃羅彩斗せんら あやと！！ちなみに15歳の腐女子なりー！よろしくネ！」

「俺は氷野紅葉^{ひの もみじ}。15歳。俺と彩斗は小さいころからの幼馴染で、
そんな時から剣道をやってた。」

「へえ、さつき一くんの攻撃を避けられたのはそれなんだ」

「うん」

「んははーちなみに部活は柔道部だったぬーん」

「ぬーん？」

平助、気にするな。気にしたら負けだぞ。

ふいに俺は顔を上げて彼らを見渡す。わー。イケメンだらけだな才
イ。彼ら（土方、斎藤は除外）も俺らに微笑みかけると、口を開い
た。

「新選組副長、土方歳三だ」

「新選組一番組組長、沖田総司です。よろしくね」

「新選組二番組組長、永倉新八！よろしくなー」

「新選組三番組組長、斎藤一。…先ほどは刀を向けてすまなかった」

「新選組八番組組長、藤堂平助！よろしくな、彩斗、紅葉！！」

「新選組十番組組長、原田左之助だ。よろしくな？」

「（分かるからいいんだけど…）（ご丁寧にどうもー！こっちこそよろしくです！）」

「…世話になる、こちらこそよろしく。あ、あと斎藤、刀のことはもういいよ。反省してんなら」

案外いい人達らしい。斎藤が申し訳ないオーラを出していたので、そう言っておいた。だってやべえもんオーラ。

ふいに外をみると、もう景色は暗闇に飲まれていた。夜だ。

「腹へったー！！！！もう我慢できねえ、飯にしようぜ飯に！！」

「腹の高鳴りがあああああ！！」

いちいちやかましいなテメーらは。俺は空腹に叫んだ平助と新八さんをあきれた目で見た。そんな二人に皆は苦笑いだ。しかし、ふたりを見る目は温かった。

「仕方ねえ、飯にするか。雪村、作ってくれるか」

「はいっ！！」

あああ健気…この子眩しすぎて直視出来ない…

そう思い、俺は視線を千鶴から逸らす。視線はそのまま彩斗の部屋の扉へと移動し、声を掛けた。

「彩斗ー、飯が出来るころには出てこいよー」

「んー…おいら今日メシいらないかなー…千鶴ちゃんにゴメンって
言っておいてー」

「おー」

俺はそう返し、視線を前に戻す。と、目の前には新八さんと平助の
顔。ワオ。何したいのお前ら？

そう思っていると、大声で平助が抗議した。

「飯だぞ飯！！皆で食うから上手いんだぞ！？」

「一人減ったらその分美味しくなくなるんだぞおお！！？」

「うるせえよ唾飛ばすな。鼓膜殺す気かお前ら？」

「あー…」

ガチャと、天井の扉が開いた。

「ごめんごめん。でもマジでいらないわ。ホントごめん」

申し訳なさそうにそういう彩斗に、平助と新八は眉をハの字にした。
が、口を開いた。

「そう彩斗が言うなら仕方ねえけど…」

「腹へったらいつでも言えよ！夜中だろうが持つてってやるからな
！！」

あ、だめだ。コイツらも眩しくて直視できねえ…

「あ、ありがと…優しいねー新八つつぁんと平ちゃんは一」

「今度こそは絶対だぞー！？」

「あー…うー…うん！…多分」

「たぶんんん！？」

「あー、ホラ！おいら少食だからさ！た、食べれないんだよねー…」

「じゃあさ、その分俺らにくー」オイ、飯出来たって　マジ！？
行く行くー！」

我慢の限界だったので俺がそう呼びかけると、二人はさっさと部屋を出て行った。

「紅葉ちゃん助かったっ！サンキュー」

「おー。無理すんなよー。無理したら殺すからなー」

「ハ、ハイ……！…そういう紅葉ちゃんも、ね！」

「わかってるっつーの」

「なんだかんだ言っても人だからなあ」

「早く治して、皆で飯食うんだからな。早く治せよ。無理にはいわないけど…」

「薬の量が多すぎてねー…もう！副作用なんて死んでしまえー！」

「ハハハ。んじゃあ俺飯食いにいくから」

「いつてらー！おかず争奪戦に巻き込まれないようにねー」

「殴ればとまるよきつとー」

そう言い部屋を出る。あ、平助の部屋、人がたくさん来たから散らかつてる。酒もこぼれてたし。…ドンマイ平助。

そう他人事のように（他人事だけどね）思い、皆の向かった先に行こうとするが、広間がどこにあるのかわかんないんだそうだった。ヤバくね？

そうまた他人事のように（今度は他人事じゃない）思っていると、「紅葉さん」と声を掛けられた。

千鶴が現れた（え

千鶴は困ったように笑うと、「こっちです」と道を案内してくれた。
なんだろう、今夜なのにこの子の周りだけ光り輝いて見える。

この時、俺は知らなかった。

千鶴がさっきの話を聞いていたなんて…。

4

「ふわぁゝ…んー！よく寝たぜー」

朝かー…ん？

「あれ、外真つ暗じゃん。まだ夜じゃん」

でも目が覚めちゃったな。

喉乾いたし水でも飲むか…そう思い、台所に行こうと部屋の扉を開けた。

廊下に足を一步踏み出した瞬間、おいらの体は落下した。

「うおおおおっ！？」

「うぎゃああああー！！！」

落ちたおいらが着地したのは、平ちゃん、もとい、藤堂平助のお腹の上。

平ちゃんはおいらの体重^{プラス}＋その衝撃に襲われ、苦悶の表情で悲鳴を上げた。

「あー…おはよう、平ちゃん」

「お、ま…彩斗…苦しッ…死ぬ…」

「あ、ゴメンゴメン」

謝っておき、お腹から降りる。…そーいえば紅葉ちゃんも土方さん踏んだって言うってたっけ。

…土方さん大丈夫だったのかな…？今日の朝も…

「ぎゃあああああああ！…！？」

「あ、お早^はう土方さん」

大丈夫じゃなかったみたいです。

*

「…つたく、何で毎回毎回、俺の上に落ちてくるんだテメエは！？
わざとだろ絶対！？」

「まさか。俺が降りようとしたところに土方さんが居ただけでしょ」

案内された広間にいくと、さっそく紅葉ちゃんと土方さんが喧嘩をしていた。

それをニコニコと（っていつか超面白そうに）見ていた沖田さんが
おいらと平ちゃんに気付き、顔をこちらに向けた。

「あ、二人ともおはよう。平助、今日は随分遅いんだね」

「仕様がないだろ！？復活するのに時間がかかったんだよ！」

「…復活？ところでさ…彩斗ちゃん、

何そのカッコ」

「ん？コレ？？リックマの全身きぐるみパジャマ」

「『はじま』…？」

両手を広げてそう言うと、不思議そうに『ぱじゃま』という単語を復唱する沖田さん。そして平ちゃん。

「パジャマってのは昔で言う寝着みたいなもんだよー」

「みんなそんな変な生き物の顔とかついてるの？」

「き、気持ち悪いとは失礼なっ！！」

「いや、気持ち悪いとは言ってないよ。思ったけど。」

「リラッ マ馬鹿にするなっ！未来ではすっげー人気」「うるせええええええええええッッ！！俺の腹の高鳴りをどうしてくれるっうううううう！！！！」

「新八つつあんの方がうるせえよ！！」

平ちゃんが喚く（ちょ

「皆さーん、朝餉の用意が出来ましたよー」

タイミングよく千鶴ちゃんから声が掛かった。
それを聞いた新八つつあんは待ってました！とばかりに自分の席へと着いた。

朝餉：朝ごはんかあ…

「彩斗ちゃんは僕の隣においでよ」

「え、あ、いや…おいら今日もご飯いらないや」

おいらがそう言つと何か言おうとした沖田さんより早く平ちゃんが口を開いた。

「はあ?! 彩斗昨日の夜も食ってねえじゃん! そんなんじゃ体持たねえぞ!?!」

「そうだぞ彩斗。メシ食って体力付けねえとだぞ?」

左之さんも心配そうに顔を歪ませ言つ。

「具合でも悪いのか?」

「え、いやー…具合悪いとかそういう事じゃなくて…、おいら未来でもあんまり朝と夜食べなかったんで…」

「朝と夜食わなければ何時食うんだよ!？」

「み、未来では昼にご飯を食べる習慣がありますから昼に食べるんだー!」

「だからってなあ!」「新八さん、朝餉運ぶの手伝ってくんない? 千鶴が大変そうだったからさ」え、あ、おう!」

紅葉ちゃんの言葉を聞いた新八つつあんは勝手場(だっけ?)に向かって行った。

「も、紅葉ちゃん…ありがとう」

「ん、」

おいらは紅葉ちゃんにお礼を言う。
これ以上問い詰められる前に部屋を出よう…。

そう思い、おいらは急ぐようにして広間を出た。

背中からは沖田さんと左之さんの視線を痛いほど感じた。

*

「…山南さん、近藤さん。こいつらだ」

「氷野紅葉です」

「閃羅彩斗です！！本物だ本物だ…！！」

「ほほう、この娘達が未来から来た子か！！俺の名は近藤勇！よろしくな！！」

頭を下げた紅葉ちゃんと、嬉しすぎて目を爛々と輝かせ同じように頭を下げたおいらに、ガタイの良い男の人…近藤さんが笑い、そう言った。

「新選組総長、山南敬助と申します。貴方達の部屋は事前に見させていただきました」

そして近藤さんとはまるで逆なほっそりとした体格の眼鏡を掛けた男の人…山南さんが微笑み、（何か怖い）告げた。

「え、マジで？」

「聞いてねえんだけど土方さん」

紅葉ちゃんはそう言って土方さんを睨み付けた。

それに「威勢の良い子だな！」と近藤さんが笑い、言った。

「新選組屯所で暮らすことを許可してやろう。…ところで、氷野くんと閃羅くん、ひとつ、伺いたいことがある」

そこで言葉を切った近藤さんに、おいら達は首をかしげる。

すると中々言えない近藤さんの変わりにだろうか、山南さんが口を開いた。

「沖田くんに聞いたのですが、貴方達は剣術を学んでらっしゃったらしいですね？」

「剣術じゃなくて剣道ね。」

「間違つても人殺しの剣なんかじゃない」

おいらがそう言い直すと、紅葉ちゃんがそう言った。

近藤さんは苦しそうに顔を歪めていたが、土方さんにコクリと頷いた。

なんだろう？

するとそれを察したかのように、土方さんが言った。

「お前らはここに置いてやる。その代わり、新選組隊士として、働いてもらう」

…マジですか。

「おおおおっ！！！！やったーっ！！隊士になれるのっ！！？」

「あ、ああ……」

土方さんはビックリしたような顔をして頷く。

「これは面白い方ですね。新選組隊士になる、という事は人を殺すと言っ事ですよ？」

山南さんは笑いながら言う。
確かに山南さんの言う通りだけど…

「でも、新選組は人殺しの集団じゃなくて人を守る集団でしょ？それに…おいらなんかでも誰かを守るなら…誰かの役に立てるなら別に構わないよ！」

「人を殺すために剣道やってたワケじゃないけどね。俺も彩斗と同じ意見」

紅葉ちゃんとおいらはお互いの顔を見て頷く。
実を言うとおいら、戦いの最中に死んでもいいって思ってる。
それは多分、紅葉ちゃんも同じだと思う。

だって元の世界に戻ったって何にもいい事ないんだから、

おいらと紅葉ちゃんは小学校の頃からイジメにあっていた。

なんで自分がいじめられてるのか分からない…おいらが何をしたの？
普通に小学校生活を送っていただけなのに…！！！！

イジメられる理由も分からないままおいら達は小学校を卒業し、中学生となった。

中学生になっても小学校同様、イジメにあった。

最初の頃は心の中で何度も「大丈夫」と唱え、通い続けた。
しかし、それも一年の冬で終わった。

おいらは一年の冬から不登校となった。

もうおいらには耐えられなかったんだ。

あの教室という恐怖の空間にいるのが…

そのままずりずりと学校に行かず、二年、三年と学年が上がっていった。

そしておいらは、ともに学校もいかないまま中学を卒業した。
卒業式にも勿論出席していない。

紅葉ちゃんは中三の秋頃から不登校になった。

そのため、おいらと同じで卒業式にも出ずに中学を卒業した。

高校に入ってもどうせイジメられる…

おいら達はそう思っていた。

イジメられるぐらいならこの薄桜鬼の世界で思っ存分戦って最後に斬られてオシマイ、なんてのも清々しくていい。

そう思う。

「…い…オイ！聞いてんのか！？」

「っ！あ、はい！すいません」

いけない！ネガティブ思考に陥っていた…

「で、お前らの配属先だが…氷野！お前は一番組だ」

「は！？なんでよりもよって沖田の組なの！？」

「いいから黙っていう事聞け！いいな！」

「っちょ…」「土方さん！おいらは何処ー？」「…彩斗…！」

紅葉ちゃんはさておき（紅葉：後で覚えてるよ）おいらの配属先がものすごい気になるので聞く。

「お前は…三番組だ。」

「三番組……は、一ちゃんの組！？マジで！？やつほおおおいつ！」

「ウザい、叫ぶな、声を上げるな。その喉掻っ切ってやろうか」

「酷い！！そんなエグいことしないで！！？」

思わず叫ぶと、真面目な顔をしていた近藤さん、山南さん、土方さんは、顔を見合わせる。

そして困ったように微笑み、こちらに顔を向ける。

「それでは氷野紅葉、閃羅彩斗。これからよろしく頼む」

「「はい!」」

『薄桜鬼』の皆を、あんな残酷な運命から救ってやる。

そう、おいらは…私は、決意した。

5

「ということで総司、コイツのことは頼んだぞ」

「分かりました。じゃ、紅葉ちゃん、こっち」

土方に『俺が一番組に配属された』ということ伝えられた沖田は、こちらを見てそう言った。

俺はそれに返事をして、彼の背中について行く。

…今日の朝、気付いたことがひとつあった。

俺と彩斗の部屋の窓に、何も景色が映らないのだ。

見えるのは黒一色のみ。土方の部屋に出たとき、彼の部屋の障子か

らは光が漏れており、起こっているのは俺の部屋と彩斗の部屋だけ、
ということは分かったが。

考え込んでいると、ドン、と何かにぶつかった。上を見上げると、
苦笑している沖田の顔。どうやら沖田の背中にぶつかったらしい。

「
…何」

「それはこっちの台詞だよ。喋り掛けても何も言ってこないし、止
まったらぶつかってくるし」

「
…ああ、ごめん。聞いてなかった」

無表情でそう言うと、一瞬表情が曇ったような気がして…きっと俺
の見間違いだわウン。

「
…何？考え事でもしてたの？」

「あ？あーうん、そう。で、今何処向かってるわけ？」

「道場だよ。一番組の隊士達に君のことを紹介しないといけないからね」

紹介ねえ…女の隊士とか言ったら何か言われるんじゃないかな俺？千鶴も男装してたし…。

そう考えていると、表情に出ていたのか沖田が笑った。

「今君すごい面倒臭そうな顔してるよ」

「いや実際めんどいし」

「仕方ないことだし、こればかりは避けられないことだからね。今紹介しないでいつ紹介するのさ」

「2000年後」

「君生意気だよね」

「アンタには負ける」

グダグダな会話をしていると、沖田が足を止めた。

前を向くと、そこには一軒の建物。

ついたのか。

沖田はガラリと引き戸を開け、中に入る。そして声を張り上げた。

「みんなちよつと集まってくれろ？」

大声とはいえない声で（超やる気なさげに）言ったのに、稽古に励んでいた隊士達はすぐに集まった。

さすが組長というべきか。でも沖田だし。

「新しい隊士が入ったから紹介するよ。

氷野紅葉^{ひの もみじ}ちゃん。女の子だけど甘やかさなくていいからね。」

『女』という単語に、隊士達はザワリと騒ぎたった。

まあそ^{男尊女卑の}ういう時代だし…仕方ないけど。何か腹立つな。

すると沖田がこちらを向き、

「君の実力を見たいから、隊士と打ち合ってみて」

「上等……んで、誰を相手すれば」

周りを見ると、何これ、リンチ？リンチの被害者になるの俺？つて
 くらいの隊士が俺の周りを囲んでました。

本当何これ。冗談じゃねえや。

まさかこれ全員相手しろと？

そう思い沖田へ振り返ると、彼はニコリと笑った。

「それじゃ、試合開始」

「才才才才才才才才才才！」

「ハアアアアア!!!!!!」

沖田の軽すぎる合図で周囲を囲んでいた隊士達は咆哮を上げ、俺に向かってくる。

いやいやいや、俺飯にもイヤ正真正銘の女の子なんですけど!?!? 何こいつら、容赦無しなんですかサイテーですねお前ら!!

そう思って俺は走る。前方、そうまさに隊士達がいる方向に。

「ハイヤー!」

「うわっ!?!?ぶふおっ!」

一人の隊士の足に向かってスライディングし、コケた隊士の木刀を

奪う。

隊士は俺の行動に驚いたのか、足をもつらせ、顔面を強打した。

俺は素早く体制を立て直し、呆然としている隊士の頭を殴る。

気絶し倒れた隊士^{仲間}を見てようやく起こった事態を理解したらしい隊士が、険しい顔をして木刀を俺に振り上げる。

(…遅いッ)

俺は隊士の手首を蹴り上げる。衝撃で隊士の手から飛んだ木刀をつかむと、それと顔面に投げつけた。

3人目、終了。

跳ね返ってきた木刀を持ち、両手にある木刀を構える。

襲い掛かる隊士をどんどんと片付けていくと、ズシン、という重い

音が聞こえてきた。

顔をあげると同時に、デカイ体格の隊士が声を上げ襲い掛かってくる。

体格が大きいだけ、カモ木刀を振り下ろすスピードも…不自然なほど早い。

しまった、

——よけられな、

ガアアア…ン

ひどい破壊音。砂煙が舞った。

一部の隊士の息を呑む音が聞こえる。

沖田は目を細め、それを見ていた。

カラカラカラ…ン

すごい破壊音の後聞こえたのは、人の倒れる音…ではなく軽い音。

「…あぶね、これ当たってたら俺死んでんじゃん」

隊士が声のしたほうに振り返る。そりゃ驚くよな。

「…な、」

今潰したはずの小娘が、木刀片手に立ってんだから。

俺は隊士の疑問を払ってあげるために、タネアカシをする。

「ざぁんねん。アンタが攻撃したのは…」

フェイク
偽者だよ

隊士が勢いよく後ろを向く。

するとそこには、俺が攻撃を食らう直前に投げ捨てた木刀。

隊士は舌打ちをし、もう一度俺に斬りかかってくる。（斬るつつつても木刀だけど）

俺はそれを受け、木刀の軌道を変える。

それによって大きく隊士がバランスを崩した。俺はソイツの脚を引っ掛け、転ばせる。

「…アンタ、木刀に何か仕込んでない？」

低く呟く。すると、上半身だけ起き上がった隊士が唾を吐き捨てながら言った。

「ハッ、男はどんなときでも必死なんだよ…どんなときでも殺す殺される覚悟をしなきゃいけないんだ！！」

お前ら女と違ってな！！！」

隊士の声が道場内に響く。

俺はこの男に相当な怒りを覚えていた。握った手に爪が食い込み、血が出る。

俺は思い切り木刀を投げ捨てると、我慢できずに叫んだ。

「ふざけんな！！『女と違って』…？女より力がある程度で図に乗んな！！！」

覚悟だと！？そんなの誰だって決めるにきまつてんだろうが！

他の隊士より力があるからって調子に乗んじゃねえよ！！！！こんなだから…！！」

こんなだから人間なんて嫌いなんだ！！

そう叫ぼうと思ったが、止めておいた。俺は行き場のない怒りをどくすればいいのか分らない。

こんな場所に長くいたくない。こんな考えしかできない奴と、同じ空気を吸いたくない。

舌打ちをし、俺は走って道場を出た。

*

沖田は紅葉が走っていった方向をじっと見つめていた。

6

「三番組に配属されました、閃羅彩斗です。よろしくおねげしやすー!」

「閃羅、挨拶はきちんとしろ」

「ハイ…」

朝メシを皆が食い終わった後、一ちゃんに「三番組の隊士達に紹介するから来い」と言われ、付いて行くと道場のような所についた。

そこにいたのは、真面目そうな人ばかりで、ぶっちゃけおいら、

(ここ、おいら無理なんじゃね?)

と思った。それほどの稽古をしていた。

うん、入った瞬間「組長!!お早うございます!!」「!!」ってどっぴうことよ?

おいらそんな真面目人じゃねえし。

が、恐る恐る挨拶してみると、

「お前女か?」

「は、はい…」

「おお!女が入るのか!華のある三番組になっていいなあ!」

「俺鋼夜^{いっせ}っていうんだ!よろしくな!」

「よ、よろしく!」

以外に受け入れてもらえました。ヤッタネ!

騒ぐ隊士を一ちゃんは静めさせると、おいらに顔を向けて言った。

「閃羅には、これから誰かと打ち合いをしてもらう。」

「イエッサー、了解です!!」

「いえっさー…?」

「あ、気にしないでいいよ!」

「そ、そうか…。では閃羅とやりたいものはいるか?」

「一ちゃんがそういうと、一人の男が手を挙げた。」

「組長!俺やりたいッス!!」

手を挙げたのはさっき紹介してもらった鋼夜くんだった。

「よし、では鋼夜。お前に任せる」

「はい！」

笑顔でそう答える鋼夜君。

あ、なんか平ちゃんと同じ属性じゃね？
ワンコじゃね？

おいらには見えるよ。尻尾と耳が。

「おっしや！閃羅よろしくな！俺はそう簡単に負けないからな！」

「おいらも負けないよーっ！」

アレ何か楽しくなって来たぞ！

一人でテンション上がっていると、一ちゃんが「これを使え」と木刀を渡してきた。

竹刀の方がやり易いんだけど…まあ仕方ないか。

「両者配置に付け」

一ちゃんに言われ、おいらは鋼夜君から１メートルぐらい距離を取る。

鋼夜君は木刀を前方に構える。

「準備はいいか？…では始め！！」

始めの合図が出されたと同時に、鋼夜君が駆け出す。

おいらは木刀を構えなおし、鋼夜君の斬撃を受ける。

…腕がしびれる。結構な手練^{てだれ}みたいだね…

木刀を振り上げて鋼夜君の木刀をはじき返す。鋼夜君は体制を立て直すと、また駆け出す。

疲れないのかな、この人。

思わずそう思ってしまったが、そんなことを思ってるくらいの余裕なんておいらにはなかった。

眼前に、木刀の先が、

「おおおおおッ！！!?」

「あ、よけられた!」

よけられた!!じゃないよ!!何今の、何今の!?むっちゃ怖かったわ!!

周りの隊士や一ちゃんも啞然としているのが見える。

「それにしてもさ、…すごいよけ方するんだな、閃羅って」

鋼夜君が呟く。

おいらはイナバ　アー通り越してブリッジの状態になっていた。

「ちょ、待って。今起きるから」

ゆっくりとブリッジの状態から元の体制に戻ると、木刀を構える。

鋼夜君も木刀を構えなおす。

双方同時に駆け出し、木刀を振り下ろす。

ガキイーン

木刀激しくぶつかり合う。

ガッ、ガキッ、ガキイッ

鋼夜君はおいらの一瞬の隙をつき、足を掛ける。

しまった、紅葉ちゃんと同じタイプの戦い方だったのか…！？

そう気づいたときにはすでに、おいらの体は傾いていた。

倒れる前に見たのは、鋼夜君の勝ち誇ったような笑顔だった…

おいらは掛けられていないほうの足で地を踏み、そのままその足を軸にして鋼夜君の後ろに回る。

ふふふ、驚いてる驚いてる。

おいらは呆然とした様子の鋼夜君の首もとに木刀を押し当てる。

「おいらの勝ち、だよな」

「な…！」

道場にいた人全員が目を見開き驚いていた。

そりゃそうだろう、年端もいかない小娘が三番組の中でも相当の手練と思われる鋼夜君に勝ったのだから。

確かに鋼夜君は隊士達の中では一番と言って言いぐらい強いと思う。

でもおいらと紅葉ちゃんには敵わないだろう。

だって2人で小さい頃から今までずっと剣道やってたからね！

そう簡単には負けないよ！！（ドヤ顔）

「せ、閃羅…お前…」

一ちゃんは目を見開いておいらに近づいてくる。

な、何だ！？

「な、何…？」

一ちゃんはおいらの目の前に来て手をガシッと掴むところ言った。

「流派は何処だ？」

「へ…？」

目を輝かせながらそうおいらに聞いてくる一ちゃん。
流派って…何！？

「い、いやー…戦い方は自己流で…流派はない、かなー！」

「そうか…今度ぜひ手合わせ願いたいものだ」

？エエエエエエエエエエ！！？？

いやさすがに新選組の幹部相手にしたら死ぬって！
さすがに勝てないってエエエエ！！

慌てているおいらを気にも留めず一ちゃんは「いつから剣をやっていた」とか「さっきのよけ方はどうやるのだ」とか聞いてくる。

一ちゃんがブリッジやってる姿を想像して思わず吹いてしまった。

うん…この人ブリッジしちゃいけない人だよ…したら色々と崩壊す

るよ…。

それからおいらは三番組の人たちと談笑していた。

以外にいい人揃いで、「女なのにスゲーな!」と褒められてしまった。

ドヤ顔になりそうになったのは秘密。

＊

あれからどのぐらい時が過ぎたのだろう。
外を見るとすっかり日が傾いていた。

もう夕方か…そろそろ薬の時間だな。

「一ちゃん、もう自分の部屋に戻っていい?」

「ああ、構わん。」

「なんだよ閃羅!もう戻るのかよ?」

隊士の人達は残念そうに言う。

この人達とは仲良くできそうだなあ…。

「うんごめんねー！んじゃまたね！」

おいらは手を振り、道場を後にした。

自分の部屋に戻ってさっさと薬飲んでしまおうと思い、部屋に向かう途中、紅葉ちゃんが前方から走ってきた。

「あれ…紅葉ちゃん？」

「！」

おいらが声を掛けると足を止め、おいらの方に顔を向けた。

その顔はお面を被っているみたいに表情がまったくなかった。

「っ紅葉ちゃん！？どうしたの？」

「忘れてたよ。やっぱり人間なんてあんなものだった」

「え…？」

これは…何かあったのか…？
ここで話して誰かに聞かれるのはちょっとマズいな…。

「紅葉ちゃん、とりあえずおいらの部屋行こ？」

「…」

紅葉ちゃんは無言で頷いた。

顔はそれこそ無表情で、何の感情もないように見えるが、目は悲しさと怒りの混ざったような色をしていた。

*

紅葉ちゃんをおいらの部屋に入れ、ドアのカギを閉める。

いきなり誰かが入ってきたら嫌だし、何より紅葉ちゃんの様子が普通じゃないから。

こういう表情になるのは、精神的に不安定な時だ。きっと誰かに何か言われたんだと思う。

「…どうしたの？何かあった？」

「…『男はいつでも殺す殺される覚悟をしなければいけない』…」。

お前ら女と違ってな『」

「…それは」

「そう言われた。目の前真っ赤になっちゃってさ…」

キレて出てきちゃった。後で沖田に叱られるね…」

紅葉ちゃんはそう呟くように言い、悲しそうに目を伏せて笑った。

しかしすぐにいつもの表情になり、おいらに問うてきた。

「彩斗は？何か言われなかった？大丈夫？つか試合やった？」

「うん、やったやった。勝ったよー。」

「へえ、そっか。こっちはさ、沖田が勝手なこと言った所為で何人も相手したんだよ…キツイわ…」

え、マジでか。

おいら鋼夜さん一人だけだったんだけど。

…三番組で良かった…。

「結局人なんてそんなもんだよね。女だからって差別してさ…俺の事も知らないクセに」

紅葉ちゃんは怒ったような、それでいて悲しいような表情をした。おいらはその表情を見て複雑な気持ちになった。

さっき試合した鋼夜君…フレンドリーに接してきてくれたけどもしかしたらそれは偽善…？

三番組の皆も土方さん達も…

実はおいら達のことを嫌っている…？

あの態度がすべて演技だとしたら…偽善だとしたら…？

そう思うと怖くなってきた。

それと同時にさっき新選組の人たちを信じようとしていたおいらが馬鹿らしく思えてきた。

あんなにつらい思いをおいらはしたんだ…人を信じて裏切られた…その苦しみは誰にもわからない。

あの時から人を信用しないと誓ったはずなのに…おいらは三番組の人達を信用してしまうところだったのか…！

今のおいらにはそんな考えしか頭になかった。

「紅葉ちゃん…おいら、もう…信じれる人が、紅葉ちゃんしかいない…よ…っ…！」

「彩斗…」

涙が溢れてとまらない。

胸がズキズキと痛い。

おいらはひたすら泣いた。

紅葉ちゃんも泣きそうに顔を歪め、拳をきつく握り締めている。

おいら達は、負の感情に押しつぶされていた…

*

「土方さん」

「デメエ総司！！仕事もしねえで何やってやがる！？」

「えー？仕事しないで上手くもない詩を詠んでる人に言われたくないなあ」

「デメエな…！」

土方は沖田の言葉に青筋を浮かべるが、何とか持ちこたえる。

そして「何の用だ」と尋ねる。

「ああ、そうそう。紅葉ちゃん、来てません？」

「あゝ？…来てねえが…どうかしたのか」

「さっき隊士と試合をさせてたんですが、いきなり飛び出していったちゃって…。あ、土方さんは五月蠅いから来なかったんだ。じゃあ平助の所かな？」

失礼なことをさらりと言い、平助の部屋の方角に顔を向ける沖田に、土方は再び額に青筋を浮かべた。

が、沖田が顔を向けたことにより、怒りは疑問に変換される。

「…なんだよ」

「行きます？」

「は？」

「だから、行きます？

…何だかんだ言っていて心配なんですよ、あの二人のこと」

沖田はそう言うと、「僕先に行ってますねー」とさっさと部屋を出て行ってしまった。

土方は溜息をつくど、重い腰を上げた。

平助の部屋に入ると、部屋の持ち主である彼はいなかった。

どうやら留守のようだ。

沖田は梯子に身を預け、目を閉じて黙っている。

そんな沖田の様子に、土方は疑問を隠せない。

「何やって…」

「じー」

土方が問おうとすると、沖田は人差し指を唇にあてそう言った。それに従い、土方は黙る。
すると微かに話し声が天井から聞こえてきた。
その声は紅葉と彩斗の物だった。

『う…ひつく…ぐす…』

(これは…)

——泣き声…？

聞こえてきた泣き声に、動揺していると、声が聞こえてきた。耳を澄ます。

『所詮…人間なんてこんなものだな…』

『うん…。もうおいら…！紅葉ちゃんしか…っ、いないよ…っ！』

『信用していた奴ほど裏切っていくんだ…。この人間も…きつと
そうだよ』

『うつ…くっ…うわああん！』

「……………」

「…………くそッ」

聞こえてくる泣き声に沖田と土方は唇を強く噛み締め、顔を歪める
しか出来なかった…

#7

道場を飛び出して、彩斗の部屋で過ごした後、俺はとりあえず自室に戻ることにした。

彩斗と会ったのが夕方だったから、今ではもうすっかり夜だ。

今から道場に戻る気も無いし。あんな飛び出し方しちゃったし…。

溜息をつく。

すると、下を向いて歩いていた所為か、角を曲がった瞬間誰かにぶつかってしまった。

ドンッ

「わ、」

「きゃあ!」

聞こえてきた声に顔を上げると、そこには同じように尻餅をついている千鶴がいた。

この子は、信用してもいいのだろうか

「ち、づる」

「もっ、紅葉さん!? 御免なさい、私前を見ていなくて!」

「…いや、いいよ。前見てなかったのは俺だって同じだし。ていうかなんで『さん』付け?」

ペコペコと頭を下げる千鶴に思わず苦笑し、手を貸してやる。この

子を信用できるかなんてそんなこと、野暮だった。

俺の手を取った千鶴は「すみません…」と謝ってから、（謝らなくていいのに）俺の質問にキョトンと目を瞬かせた。

「え？だって紅葉さんと彩斗さんって私より年上じゃ…」

「千鶴何歳？」

「16です」

「俺と彩斗は千鶴より年下だよ。今年15だから」

そう自分に指を指して言う。

すると、千鶴は目を丸くし、「嘘…そうだったんですか!？」と驚いた。

「うん。あと、敬語もいらないから。」

「え！？でも…そんな、失礼です」

「いらないつつてんだから良いんだよ。これからは敬語ぬきでよろしく」

そういうと、千鶴は顔を輝かせ、

「うん！」

と笑った。

*

「失礼！…っっていないのか」

千鶴と別れ、自分の部屋に戻るために土方の部屋にきていた。

土方のことだから部屋で仕事しているのだろうと思い、失礼しますときちんと言って襖を開けてみるとそこに土方の姿は無かった。

（どっか出かけてんのか？）

そう思い、「まあどうでもいいか」と梯子に手をかける。

その時、静かな室内に声が響いた。

「何してる、こんな時間に」

「！」

声のした方を見ると、この部屋の持ち主の土方が静かに立っていた。いつのまに…

「別に。自分の部屋戻ろうとしただけ」

「こんな時間まで何していた？」

しつこいな…

「何だっていいだろ。お前には関係ない」

「…ちっ」

土方は眉間に皺を寄せ、不機嫌そうに舌打ちする。

「お前は黙ってセンスの無い『ほうぎょく』でも書いてろ」

「ハア！？テメツ、何でそれ知って…」

「沖田に聞いた」

「総司……!!」

青筋を浮かべて土方は呟く。俺に『ほうぎょくほつくしゅう』のことを教える沖田の姿を想像しているんだろう。

土方が（青筋浮かべながら）再びこっちに顔を向ける。

「テメエ何か隠してねエ」「おやすみー」 人の話を聞けエエエエ
「……!!」

無視して上がろうとすると、土方に袴を掴まれた。

あ、言うの忘れてたけど読者の皆さん、俺たちここに住むことになってから新選組の皆に「その服（現代の服）は怪しまれるから止める」って言われて袴を借りてるんです。これから覚えておいてね。

土方が俺の袴を掴んだ所為で、俺は止まることを余儀なくされた。

クソッ、土方め。

恨めしげに振り返ると、そこには真剣な顔をした土方がいた。

心臓が鳴る。

イヤイヤだってコイツ黙ってればめっちゃくちやイケメンですよ？
(眉間に皺寄ってるけど。)

こんな顔されたら俺：

「ゴメン、俺アンタ好きじゃないんだわ」

「どこがどうなってそんな話になるんだ！？黙って降りやがれ！」

そう断ると、土方は鬼の表情で叫んだ。うるせえな。声デケェんだよ。

いつまで立つても袴を話そうとしないので、渋々降りる。

すると、

「座れ」

と座布団を出された。…以外と礼儀正しい奴？でも声デケェしな。マナー悪くね？

おとなしく座ると、土方は再び真剣な顔をした。

緊迫する空気の中、土方^{ヤッ}が口を開いた。

「お前、人間^{ひと}嫌いなのか」

「！」

土方の口から出た言葉に目を見開く。

（なんで…コイツが……そのことッ…）

混乱して頭がうまく回らない。口の中が渴く。

しばらくして出せた言葉は、

「…何で」

の短い疑問だけだった。

「…お前がさっき、彩斗の部屋で話してる内容、わりいが聞かせてもらった」

「っ…盗み聞きですか。悪趣味ですね」

「…で、どうなんだ？彩斗もそうみたいだったが…」

俺は腹が立った。

目の前にいる土方は心配そうに顔を歪ませている。

きつと心底心配しているのだと思う。

だが、今の俺にはその心配が偽善のように見える。
えて仕方が無かった。

「黙れよッ！お前らに言う必要なんか何処にもないッッ！」

「っ…！」

俺は思いつきり土方を睨みながらそう言った。

なんでお前らなんか言わなきゃいけないんだよ！

どうせ俺らのことなんて本当に心配してないんだろ？！

「お前……！俺は心配して……」その心配はどうせ偽善だろ！？本当は俺らのことなんて心配してないんだろ！？……どうでもいいんだろっ！……！？」なっ……！」

土方は目を見開いた。

そして酷く傷ついたような顔をした。

なんでそんな顔するの？

それも演技？

やめろよ……そんな顔されたら……

「っ……」

これ以上、いえないじゃないか……。

俺は梯子を急いで上り、部屋のドアをボタン！と閉めた。

「……俺はッッ」

取り残された土方は、拳を強く握り締め、そう呟いた。

#7（後書き）

土方さんの扱いが酷いwwごめんね土方さんww

次回から本編、池田屋事件の方に入ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0023y/>

新選組居候物語。

2011年11月17日21時24分発行